

小林市教育研究センター

I	研究主題	…………	2-4-1
II	主題設定の理由	…………	2-4-1
III	研究目標	…………	2-4-1
IV	研究仮説	…………	2-4-2
V	研究構想	…………	2-4-2
VI	年次計画	…………	2-4-3
VII	研究組織	…………	2-4-3
VIII	研究内容	…………	2-4-3
1	0歳児からの教育研究グループの取組	…………	2-4-3
(1)	取組のねらい	…………	2-4-3
(2)	組織及び作業の進め方	…………	2-4-4
(3)	幼児用紙芝居部会の取組	…………	2-4-4
(4)	保護者用テキスト部会の取組	…………	2-4-4
2	授業づくり研究グループの取組	…………	2-4-4
(1)	実態調査班の取組	…………	2-4-4
ア	実態調査の目的・方法	…………	2-4-4
イ	実態調査の結果と考察	…………	2-4-5
(2)	授業研究班の取組	…………	2-4-7
ア	児童生徒が主体的に学ぶ授業の定義	…………	2-4-7
イ	主体的に学ぶ授業において見られる 児童生徒の姿	…………	2-4-8
ウ	児童生徒が主体的・協働的に学ぶ必 要性	…………	2-4-8
エ	課題と改善点	…………	2-4-8
オ	実践に向けた取組内容	…………	2-4-9
IX	成果と課題	…………	2-4-10
1	成果	…………	2-4-10
2	課題	…………	2-4-10
○	引用・参考文献		
○	研究同人		

I 研究主題

「学びたい」「学ばせたい」気持ちを高める小林教育の実現
～就学前教育の充実を図る教材開発と主体的な学びを重視した授業づくりを通して～

II 主題設定の理由

今日、IT化やグローバル化等により、構造的な変化が様々な分野において急速に進んでいる。そのような社会を生き抜くために必要とされる力は、「21世紀型スキル」や「キーコンピテンシー」として広く浸透し、その中には単なる知識の習得や情報活用のみならず、思考の方法や自律的に行動する能力等といった、態度（情意）面の要素も含まれている。すなわち、常に主体的であることが必要とされており、世界で起きている事象や身の回りの課題について、自ら情報を収集し、納得したことを基に自ら考え、判断し、行動するということが求められている。

本県においては、本年度の第二次宮崎県教育振興基本計画の改訂において、個人の多様な能力・個性を最大限伸ばさせ、生涯にわたり自己実現ができる人材づくりや郷土愛、あるいはグローバルな視野を育むとともに、地域・社会の一員としての自覚を培うことで、国内外に開かれた「みやざき新時代」を築く人材づくりを推進していくことが示されている。

本市においては、市の将来像として、「霧島の麓に人・産業・歴史・自然が息吹き、元気あふれる交流都市」をめざしており、この将来像を実現していくために、昨年度「0歳から100歳までの小林教育プラン」を策定して、『学びたい』『学ばせたい』気持ちを高める小林教育」を教育目標とし、学校教育、社会教育、スポーツ振興の各分野の取組の充実に努めている。

そこで、本研究においては、本市の取組の具現化を図るために、本年度から、就学前と小・中学校段階における教育について、それぞれ次のような考え方で取組を進めていくこととした。

まず、就学前の段階においては、小林市民として必要な教育内容を盛り込んだ幼児向け紙芝居の作成や保護者向けテキストを作成する。このことによって子どもと親双方の学びを推進し、情意面を高める0歳児からの教育の充実を図り、生涯にわたって学び続けるための素地を養うことができると考えている。

次に、小・中学校段階においては、昨年度まで、本市研究センターの取組として、基礎的・基本的な知識や技能の確実な習得と、それらを活用する授業の在り方について研究を進めてきた。しかしながら、教師が普段感じている児童生徒の姿として、授業において受け身であったり、粘り強さや挑戦する気概を感じられなかったりするなど、情意面に関する課題が多く挙げられた。基礎的・基本的な知識や技能と、それらを活用する力を車の両輪に例えるとすれば、学ぶ意欲や態度等の情意面は、原動力の部分である。そこで、目指す児童生徒の具体的な姿を「学習意欲や課題意識をもち、考えを交流させ、自分の力で解決できる児童生徒」とし、これを実現するために主体的な学びを重視した授業づくりについて研究を進めていくこととした。

このように、本研究センターにおいては、上記のような実践的な研究を行うことで、本市の掲げる『学びたい』『学ばせたい』気持ちを高める小林教育」の具現化を目指すことができるのではないかと考え、本主題を設定した。

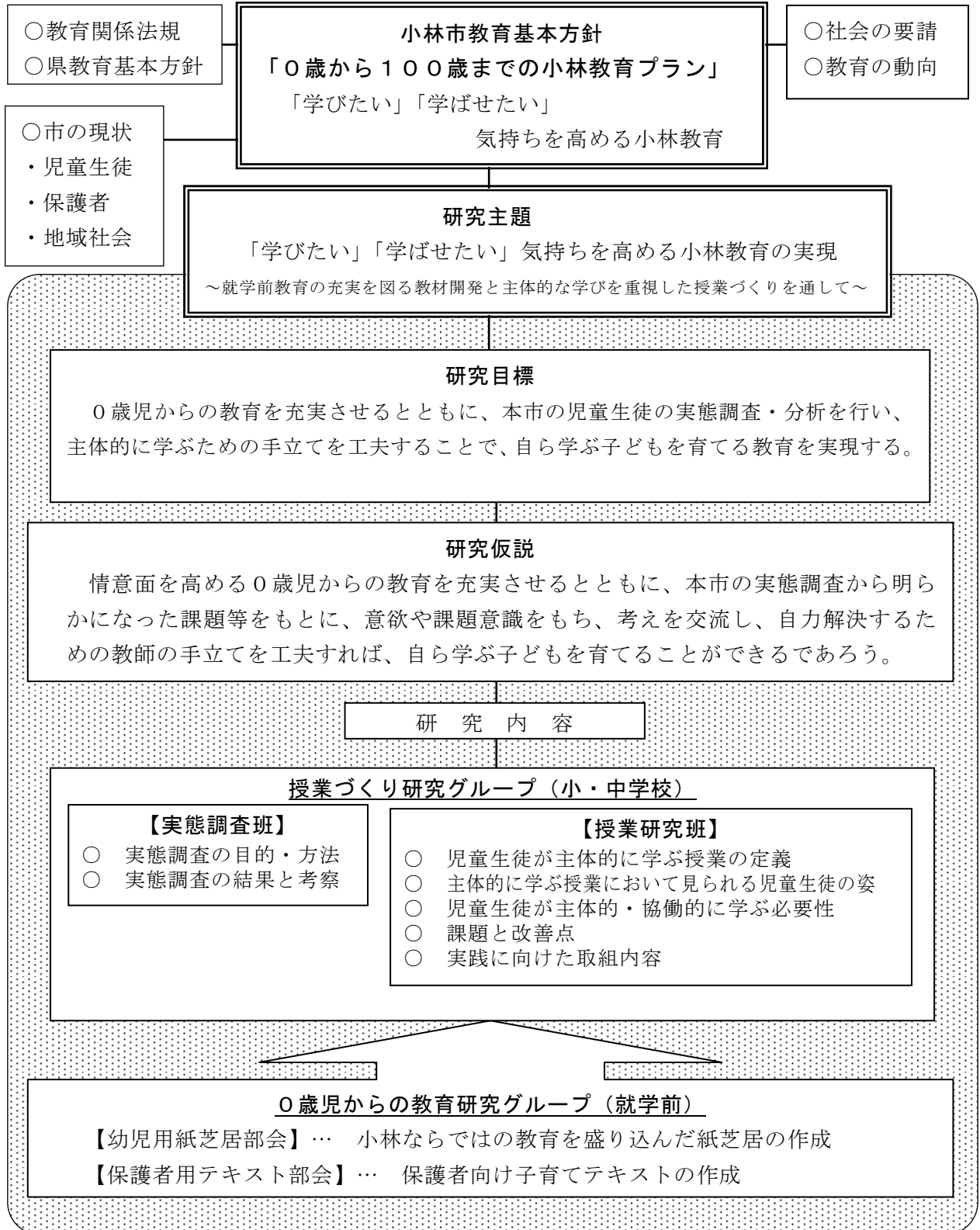
III 研究目標

0歳児からの教育を充実させるとともに、本市の児童生徒の実態調査・分析を行い、主体的に学ぶための手立てを工夫することで、自ら学ぶ子どもを育てる教育を実現する。

IV 研究仮説

情意面を高める0歳児からの教育を充実させるとともに、本市の実態調査から明らかになった課題等をもとに、意欲や課題意識をもち、考えを交流し、自力解決するための教師の手立てを工夫すれば、自ら学ぶ子どもを育てることができるであろう。

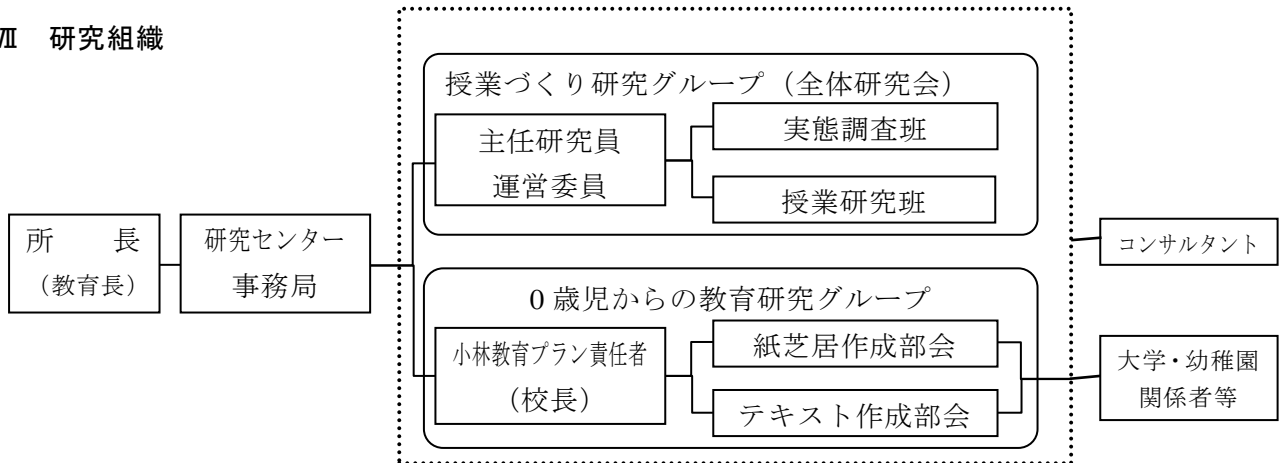
V 研究構想



VI 年次計画

	0歳児からの教育研究グループ	授業づくり研究グループ
1年次	○ 保護者用テキストや幼児用紙芝居（3歳以上対象）を作成する。	○ 実態調査を基に、主体的な学びについての理論を構築し、授業改善の方法を探る。
2年次	○ 保護者用テキスト（6歳児対象）や幼児用紙芝居等（5・6歳児対象）を作成する。	○ 授業実践を通して手立ての効果を検証し、改善するとともに、授業モデルを明らかにする。
3年次	○ こすもす科へのつながりを意識した紙芝居や絵本（6歳児対象）を作成する。	○ 授業モデルを確立し、3年間の取組の成果を検証し、市内各学校への周知を図る。

VII 研究組織



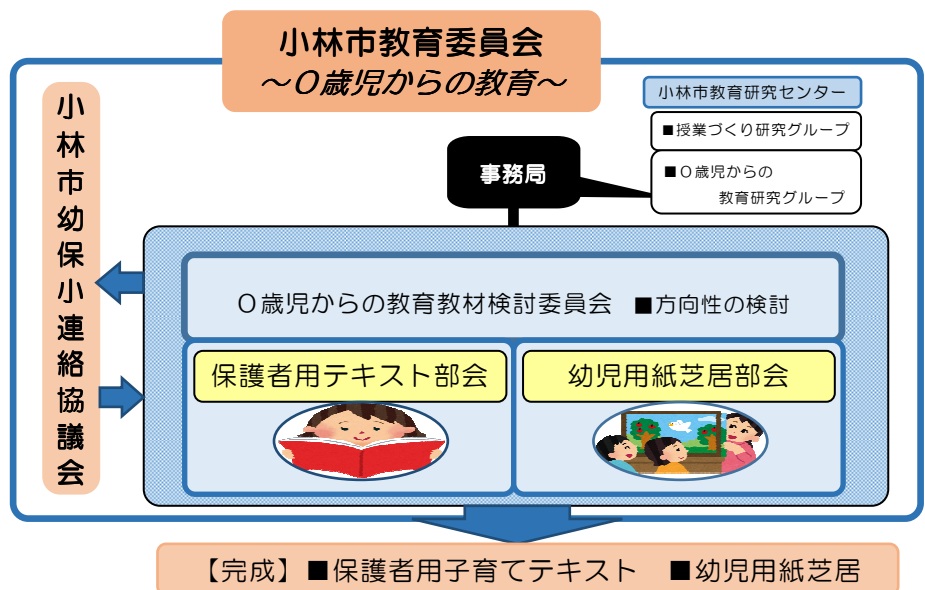
VIII 研究内容

1 0歳児からの教育研究グループの取組

(1) 取組のねらい

近年、価値観の多様化により、親の子育てに対する過干渉、放任といった極端な家庭教育が行われるなど、子どもを健全に育てるための親としての望ましい認識が不足している面が本市の保護者にも見られてきている。そこで、出産前の親及び就学前の保護者を対象に、子を持つ親としての心構えや子どもを養育するうえでの基礎的知識等を学ぶためのテキストや、小林ならではの教育を盛り込んだ幼児向け紙芝居を作成する。

このような親の学びと子どもの学び双方からの取組をとおして、0歳児からの教育の充実を図ることにより、小・中学校での学びの基礎をつくり、就学前からの継続的な教育を実現する。



【図1 0歳児からの教育】

(2) 組織及び作業の進め方

保護者用テキストと紙芝居作りについての具体的な作業は、0歳児からの教育研究グループが事務局となり、大学関係者や幼稚園等関係者からなる0歳児からの教育教材検討委員会での協議・検討をもとに進めた(図1)。

(3) 幼児用紙芝居部会の取組

ア 紙芝居作成のねらい

小林市が大切にしている「知」「徳」「体」「食」に係る豊かな感性を幼児期から育てることにより、小学校への円滑な連携を図りたいと考えた。また、子どもたちの「将来、自立するための力」「周りの人に感謝する心」「地域社会に貢献しようとする態度」を育成するため、市内のすべての子どもたちに、楽しく、分かりやすく伝え、やってみようという気持ちを高めさせるための手段として小林ならではの教育を盛り込んだ幼児向け紙芝居を作成した(図2)。



【図2 紙芝居】

イ 活用法

- ・ 市内全ての幼稚園・保育園(所)・小学校等に紙芝居を配付し、子どもの実態に応じて活用する。
- ・ 保健所や公民館等での各種検診時や講演会の際に、活用する機会を設ける。

(4) 保護者用テキスト部会の取組

ア テキスト作成のねらい

心と体の基礎は、就学前に育つため、子どもの健やかな成長のためには、0歳から6歳までの育て方が大切になる。学びの原動力となる情意面を高めるには、保護者の役割が大変重要となる。そこで、小林市の就学前の子ども(妊娠中を含む)がいる保護者に、小林市の教育を理解してもらい、自信をもって子育てできるよりどころにしてもらうためにテキストを作成した(図3)。



【図3 テキスト】

イ 活用法

- ・ 母子手帳を渡す際に一緒に配付する。
- ・ 幼稚園・保育園(所)等に入園する際に配付する。

2 授業づくり研究グループの取組

(1) 実態調査班の取組

ア 実態調査の目的・方法

実態調査班では、「主体的な学び」に係る児童生徒及び教職員の実態を把握・分析することを目的として2種類のアンケートを作成し、小林市内の全小・中学校で実施した。

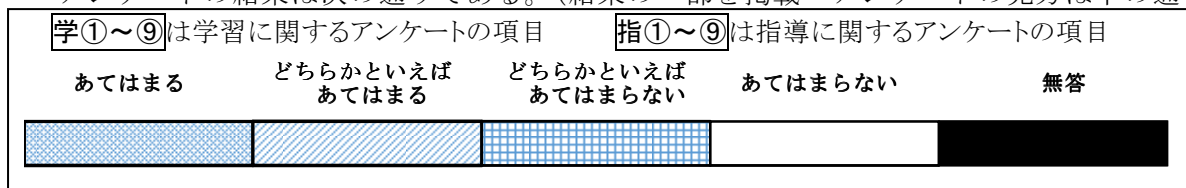
アンケートの作成に当たっては、本研究センターが考える「主体的に学ぶ児童生徒の姿」からアンケート項目を設定することを基本とした。また、児童生徒の学習の実態と教師の指導の実態を比較するため、2種類のアンケートには関連する項目を設定した。

【表1 アンケート対象者と総数】

アンケート	対象	対象人数
学習に関するアンケート (児童生徒用)	小学校4～6年生	1,242人
	中学校1～3年生	1,250人
指導に関するアンケート (教師用)	児童生徒へ学習指導を行う教諭等	210人

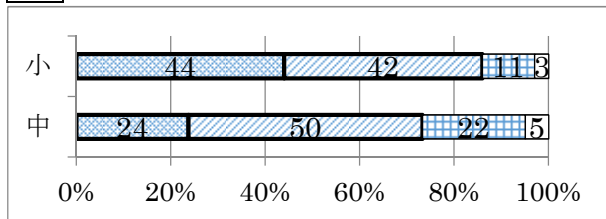
イ 実態調査の結果と考察

アンケートの結果は次の通りである。(結果の一部を掲載・アンケートの見方は下の通り)

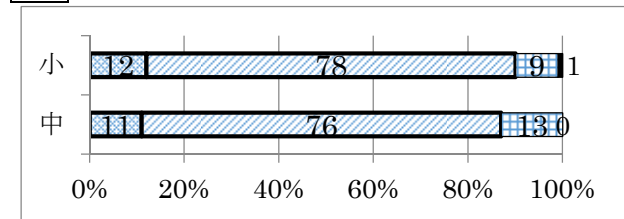


【意欲・課題意識】

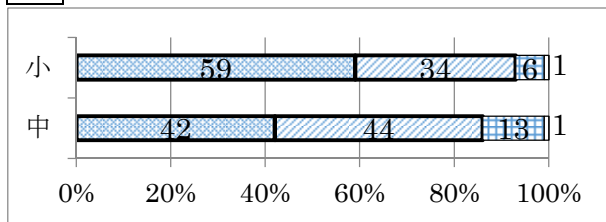
学① 新しい問題(課題)に出合った時、それに取り組みたいと思いますか。



指② 児童生徒の意欲や課題意識を高める導入を行っていますか。



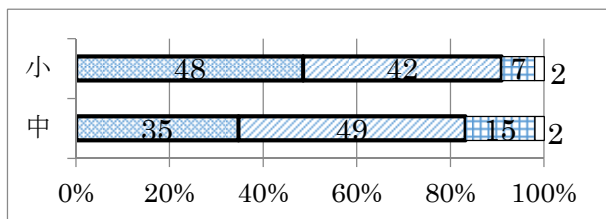
学② まずは、自分の力で問題(課題)に取り組もうとしていますか。



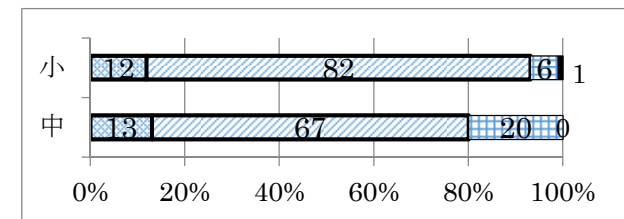
学①②を比較すると、「取り組もうとする」割合に対して「取り組みたいと思う」割合が少ないことから、児童生徒は学習に対してやや受動的ではないかと考えられる。また、学①②と指②との比較から、教師が行う導入が児童生徒の意欲や課題意識を高め、主体的な学びを促すものになっていないと考えられる。このことから、導入の工夫について検討する必要があると考える。 【考察1】

【考える 自分の考えもつ・書く・話す】

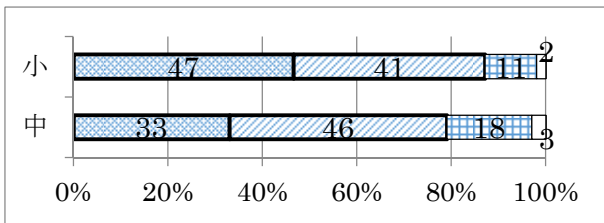
学③ これまでに学習したことを生かして、問題(課題)を解決しようとしていますか。



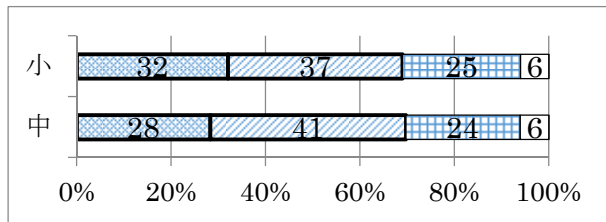
指③ 児童生徒が自分の考えをもてるように具体的な手立てをとっていますか。



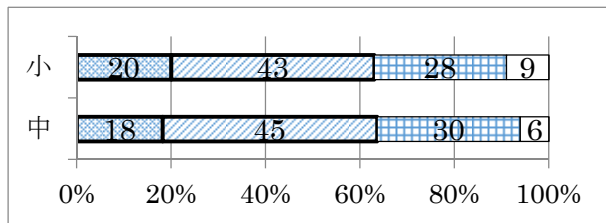
学④ 自分の考えを書くことができますか。



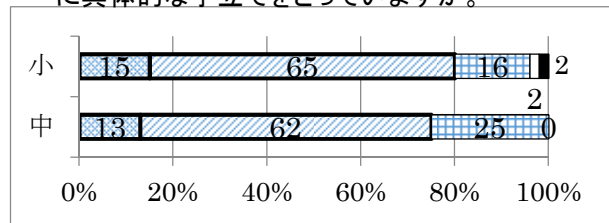
学⑤ 自分の考えを話すことができますか。



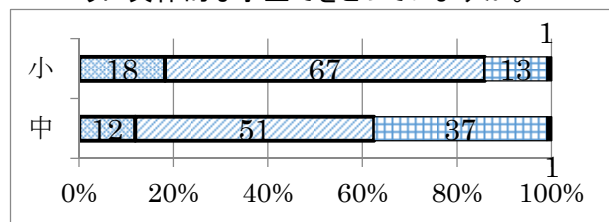
学⑥ 自分の考えを書いたり話したりする時、理由や根拠を付け加えるようにしていますか。



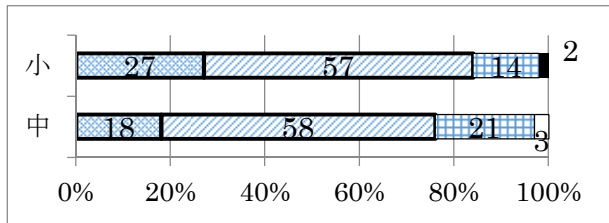
指④ 児童生徒が自分の考えを書くことができるように具体的な手立てをとっていますか。



指⑤ 児童生徒が自分の考えを話すことができるように具体的な手立てをとっていますか。



指⑥ 考えの理由や根拠を述べさせるようにしていますか。



学③④から、児童生徒は学習したことを生かして考えたり、自分の考えを書いたりすることは、ある程度できていることが分かる。しかし、学③④と学⑤⑥を比較すると、「書くこと」に比べて「話すこと」に課題があり、話すことができる児童生徒も理由や根拠を付け加えて話すまでには至っていないことが分かる。

学③④⑤⑥と指③④⑤⑥を比較すると、「自分の考えをもつ・書く」手立ては、児童生徒の「考える力・書く力」の育成にある程度つながっているが、「自分の考えを話す手立て」は児童生徒の「話す力」の育成につながっているとは言えない。また、「自分の考えをもつ・書く」手立てに比べて「自分の考えを話す」手立ては十分にとられていないことも分かる。

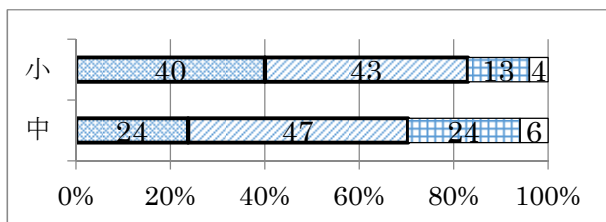
つまり、児童生徒の学びは「個」が中心であり、他者と考えを交流することを意識したものになっていないと考える。これは、教師の授業づくりが児童生徒の学び合いを重視したものになっていないことを意味する。

このことから、授業づくりにおいては、音声言語を中心とした対話を重視し、表現の場を工夫して、児童生徒の「話す力」を高める必要があると考える。「答え」のみを伝えるのではなく、「なぜそう思ったのか」「どのようにして答えに至ったのか」など、他者を意識した「話す力」の育成が必要である。

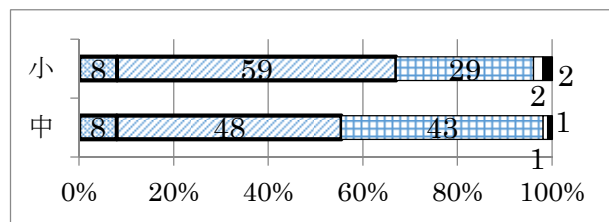
【考察2】

【考える 友達の考えを聞く】

学⑦ 友達の考えを聞く時、自分の考えと似ている点ちがう点を比べながら聞いていますか。



指⑦ 児童生徒が自分と友達の考えを比べながら聞くことができるように具体的な手立てをとっていますか。

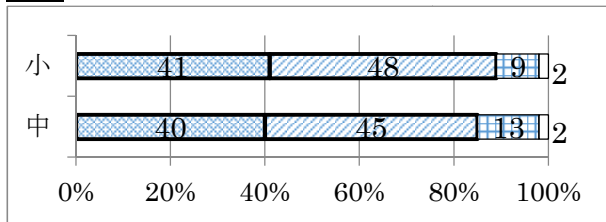


学⑦と指⑦から、「聞く」手立ては十分にとられていないものの、「自分と友達の考えを比べながら聞いている(どちらかといえど聞いている)」と答えた児童の割合が高かった。「自分と友達の考えを比べながら聞くこと」に対する教師と児童生徒の認識には差があるのではないかと考える。ただ「似ている」「ちがう」だけでなく、「どこが」「なぜ」などを考えながら聞くことや、自分と友達の考えを関連付けて更に深く考えることが重要であるが、児童生徒の認識はそこまで至っていない。

このことから、授業づくりにおいては「自分と友達の考えを比べながら聞くこと」を思考を伴う活動にしなければならない。音声言語を中心とした対話を重視し、児童生徒の「聞く力」を高める必要がある。その際、思考を伴った聞く活動ができるように、学び合いの在り方を工夫するとともに教師のファシリテーターとしてのスキルを高めることも重要だと考える。

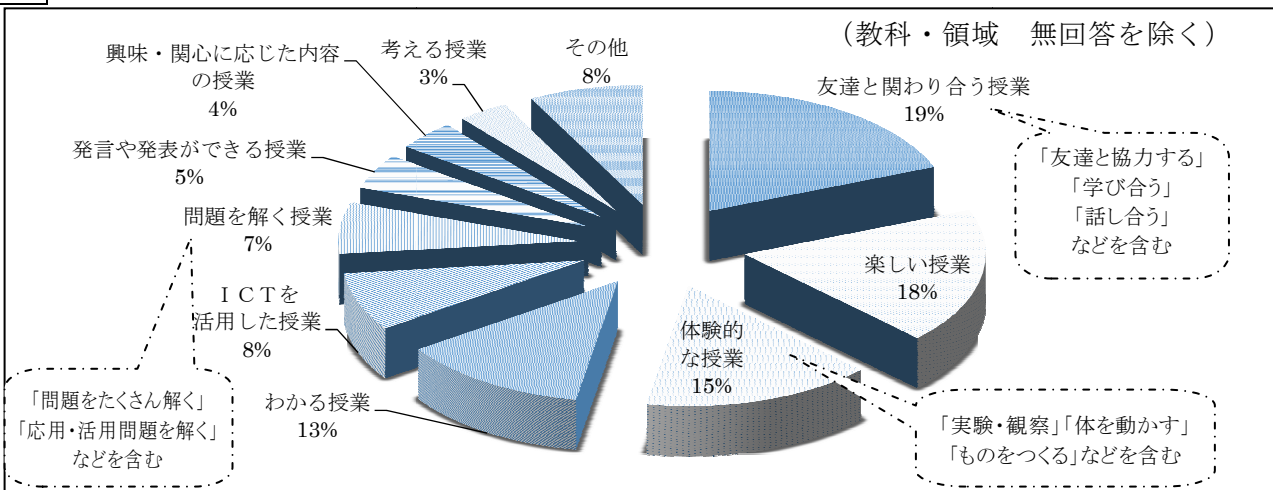
【考察3】

学⑧ 友達と考えを交流させる活動は、自分の考えを深めたり学習内容を理解したりすることにつながっていますか。



学⑨は、「主体的な学び」に係る児童生徒の率直な声を聞くために自由記述とした。集計については児童生徒が記述した内容を項目別に分類しており、複数回答もある。

学⑨ あなたが「進んで学びたい」と思える授業は、どんな授業ですか。 ※ 自由記述



学⑧⑨から、友達と考えを交流させる活動は、自分の考えを深めたり学習内容を理解したりすることにつながっていると感じている児童生徒が多いことや、児童生徒が考える「進んで学びたい」と思える授業には、友達との関わり合いに関する回答が多いことが分かる。つまり、友達との学び合いは、児童生徒の学びをより確かに、より主体的にすると考える。このことから、「主体的な学び」の実現においては、児童生徒相互の関わりを重視した学習活動を工夫する必要がある。

以上のようなアンケート結果から、本研究を進めるに当たっては、音声言語を中心とした対話を重視し、児童生徒の思考を促す学習活動の工夫や教師のスキル向上が必要だと考える。

【考察4】

(2) 授業研究班の取組

授業研究班では、実態調査班の調査結果を踏まえながら、授業を中心とした「主体的な学び」に係る理論構築や日々の授業を通して目指す児童生徒を育成するために、授業改善の方法を探り出し、次年度以降の検証へとつないでいくこととした。

ア 児童生徒が主体的に学ぶ授業の定義

導入段階で、学習者一人一人に学習意欲や課題意識をもたせることで、活発な意見交流へとつなげる。また、交流の場面においては、自分がかつとももっていた考えやグループで作った考えをよりよいものへと変化させるという高い意識をもつことが重要であると考え、本研究における、児童生徒が主体的に学ぶ授業を次のように定義した。

個が学習意欲や課題意識をもち、考えを交流させながら練り上げ、課題を解決していく授業

イ 主体的に学ぶ授業において見られる児童生徒の姿

学習意欲や課題意識をもつ児童生徒の姿

- まずは自分の力で解決しよう（自分の考えをもとう）としている。
- 課題解決の道筋を理解している（自分で考えられる）。
- 興味・関心をもって課題に取り組む。

考えを交流させる児童生徒の姿

- 理由や根拠をつけて分かりやすく自分の考えを述べようとしている。
- 他者の意見を、問いや批判的思考等を持ちながら真剣に聞く。
- 集団で学び合うことのよさを実感している。
- 特定の児童生徒だけの意見交換ではなく、全員が交流する。

自分の力で解決できる児童生徒の姿

- 課題解決できたことに達成感を感じられる。
- 課題に対する結論をしっかりと導き出せる。
- 授業前と変容が見られる。

ウ 児童生徒が主体的・協働的に学ぶ必要性

児童生徒が主体的に学ぶ授業の定義は上述したが、現在行っている実際の授業はどうなっているかを振り返った。下のように、児童生徒が主体的に学んでいるように見えるが、実際にはそうになっていない授業（以下「主体的なつもりの授業」とする。）があるのではないかと考えた。

「主体的なつもりの授業」

- 一部の児童生徒の発言によって授業が進められていく授業
- グループ学習を取り入れる目的がはっきりしない授業
- 教師が指示や支援を与えすぎており、児童生徒自らが考えていない授業
- 振り返りの時間がなく、児童生徒が何を学んだかを理解していない授業

このような授業を展開していったとしても、児童生徒は自ら思考をする場をもつことができず、主体的に課題に向き合うことは難しいのではないかと考えられる。また、実態調査班のアンケート結果において、【考察1】からは児童生徒が学習に対してやや受動的であるということ、【考察2】と【考察3】からは児童生徒の「話す力」と「聞く力」を高めることの必要性が課題として挙げられた。また、【考察4】では、児童生徒の相互の関わりを重視した学習活動の工夫の必要性も挙げられている。

そこで、これらの課題を改善するためには、児童生徒が「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習」（平成26年11月中教審答申）であるアクティブ・ラーニングの考え方は有効な手段になり得るのではないかと考えた。

アクティブ・ラーニングを取り入れた授業を展開するためには、講義型の一方的な授業ではなく、教師は進行役という立場で児童生徒の意見を引き出しながら、主体的な学びを促進していかなければならない。学びの場をつくり、集団の学びを支援・促進する教員のファシリテーターとしての役割が重要となってくる。

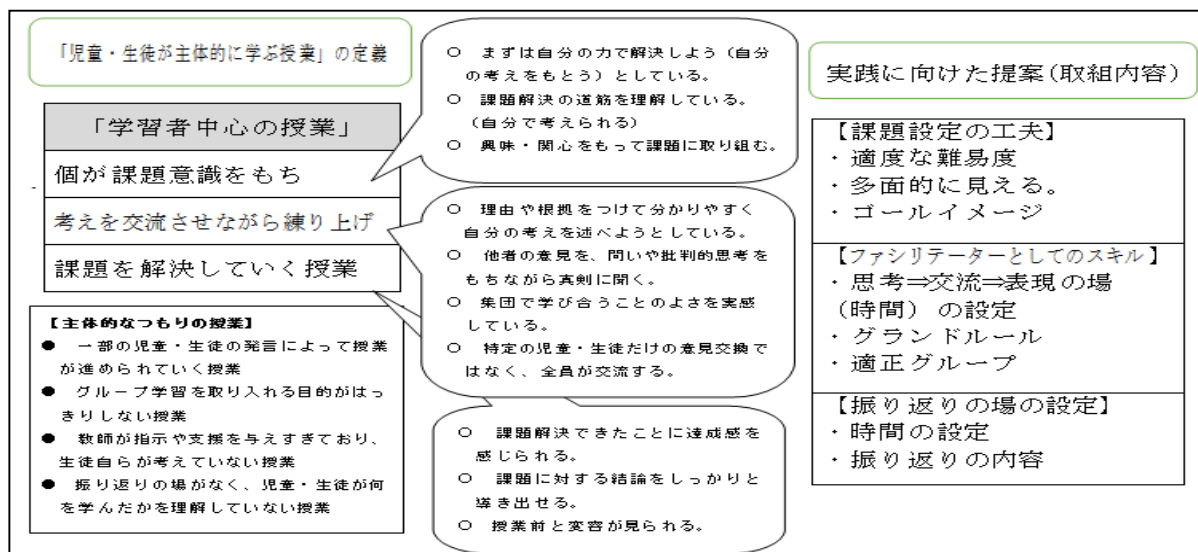
エ 課題と改善点

ウで述べた課題を解決するための具体的な改善方法を考えることとした。さらにそれらを実践に向けた取組につなげるため、3つの授業改善の視点を考えた。

●「主体的なつむりの授業」の課題 ★アンケート結果から見えた課題	改善点	授業改善の 視点
● 一部の児童生徒の発言によって進められる授業 ★ 児童生徒が学習に対してやや受動的である。	○ 児童生徒全員が自分の考えをもち、課題をグループで解決していく。グループのメンバーそれぞれが思考・判断していくことで学習が進んでいく形をとるようにする。	課題設定の工夫
● グループ学習を取り入れる目的がはっきりしない授業	○ ゴールイメージを学級全体で共有するようにし、なぜグループ活動を取り入れるのかを明確にする。 ○ グループ学習の必要性を体感させる。	
● 教師が指示や支援を与えずに、児童生徒自らが考えていない授業 ★ 「話す力」「聞く力」を高める必要がある。 ★ 児童生徒相互の関わりを重視した学習活動を工夫する必要がある。	○ 活動を行う前に、分かりやすいインストラクションを行う。何を（ゴール）・なぜ（目的）・どのように（やり方）を理解させる。 ○ 音声言語を中心とした対話を重視し、理由や根拠を付けて自分の意見を述べたり、自分の考えと比較しながら友達の意見を聞いたりする活動を取り入れる。 ○ 教師は進行役という立場で児童生徒の意見を引出しながら、主体的な学びを促進していく。	教師のファシリテーターとしてのスキル
● 振り返りの場がなく、児童生徒が何を学んだかを理解していない授業	○ 学習内容の定着をふり返らせる。 ○ 主体的な学びになっていたかどうか、学習態度を振り返らせる。	振り返りの場の設定

オ 実践に向けた取組内容

アクティブ・ラーニングを取り入れた授業の手立てとして、以下のような取組を次年度は実践していきたいと考えている。



【図4 児童生徒が主体的に学ぶ授業と実践に向けた取組内容との関連図】

① 課題設定の工夫

課題設定を工夫し、適度な難易度の課題を与えることで、児童生徒の興味・関心の高まりが期待される。これにより、前項の学習に関するアンケート結果から明らかになった児童生徒の受動的な態度の改善を図っていきたい。さらに、多面的に考察し、掘り下げて考えることのできる課題を与えることで、自分の考えをわかりやすく伝えたり、批判的思考を持ちながら真剣に聞いたりする交流が活発になり、深まりのある練り合いができると考えた。また、このとき課題解決の道筋を明らかにすることや、学習のゴールイメージが見えるということも大切なポイントである。

② 教師のファシリテーターとしてのスキル

教師は、児童生徒に一方的に講義をするというような教師主導の授業ではなく、教師は児童生徒が主体的に学習する学びの場づくりをするファシリテーターに徹する授業を行っていく。また、思考→交流→表現の場（時間）を設定し、交流の場においては音声言語を中心とした対話を重視することで、児童生徒が自分の考えに根拠をもって話したり、友だちの意見と比較して聞いたりする力を伸ばしていきたい。

③ 振り返りの場の設定

振り返りの場を設定し、学習課題のみならず行動に対する振り返りを行わせることで児童生徒の主体的な学びとなっているかどうかを測ることができると思う。

IX 成果と課題

1 成果

- 就学後の教育につながる0歳児からの教育については、幼児教育に係る各種関係機関との連携を図りながら、横断的な取組をとおしてテキストや紙芝居を作成することができた。
- 市内の児童生徒及び教職員の実態調査から、主体的な学びに関する課題を多面的に把握し、研究の方向性を見出すことができた。

2 課題

- テキストや紙芝居について、効果的な活用方法についても研究を進めていく必要がある。
- 今後は小・中学校での授業実践を通して、手立ての効果を検証する必要がある。

○ 引用・参考文献

- 『アクティブ・ラーニング入門』（小林昭文 2015年 産業能率大学出版部）
- 『授業改善のための学習指導案』（藤村裕一 2015年 ジャムハウス）
- 『教育ファシリテーターになろう』（石川一喜・小貫仁 2015年 弘文堂）
- 『「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」答申用語集』（2012年）

○ 研究同人

所 長	中屋敷史生	(小林市教育委員会教育長)	研 究 員	本 菌 理子	(小林市立東方中学校 教諭)
教 育 部 長	山下 康代	(小林市教育委員会教育部長)	研 究 員	日高 幸浩	(小林市立三松中学校 教諭)
主任指導主事	河野 康男	(小林市教育委員会学校教育課教育指導監)	<0歳児からの教育研究グループ>		
事 務 職 員	古沢 博文	(小林市教育委員会学校教育課主幹)	総括リーダー	本部礼次郎	(小林市立須木小学校 校長)
指 導 主 事	岩切 淳	(小林市教育委員会学校教育課指導主事)	班長(テキスト)	馬場田亭子	(小林市立西小林小学校 教諭)
指 導 主 事	田村 智宣	(小林市教育委員会学校教育課指導主事)	班長(紙芝居)	竹森 文洋	(小林市立栗須小学校 教諭)
<授業づくり研究グループ>			研 究 員	一木 季次	(小林市立南小学校 教諭)
主任研究員	脇山 辰己	(小林市立細野小学校 教頭)	研 究 員	田口 正子	(小林市立東方小学校 教諭)
運 営 委 員	郷田良太郎	(小林市立永久津小学校 教諭)	研 究 員	勝吉 千穂	(小林市立須木小学校 教諭)
副運営委員	内山田博文	(小林市立小林小学校 教諭)	研 究 員	濱脇きよみ	(小林市立細野中学校 教諭)
班長(実態調査)	湯浅 美紀	(小林市立野尻小学校 教諭)	研 究 員	松田 裕子	(小林市立須木中学校 教諭)
班長(授業研究)	岩崎 香恵	(小林市立野尻中学校 教諭)	<コンサルタント>		
研 究 員	長崎 雄史	(小林市立細野小学校 教諭)	平川 康子	(小林市立小林小学校 指導教諭)	
研 究 員	宮本 桃衣	(小林市立三松小学校 教諭)	大木場俊弘	(小林市立西小林小学校 指導教諭)	
研 究 員	長谷川純一	(小林市立小林中学校 教諭)	赤崎 好次	(小林市立三松小学校 指導教諭)	
研 究 員	橋元 一博	(小林市立西小林中学校 教諭)	中山 新吾	(小林市立三松中学校 指導教諭)	
研 究 員	尾崎 瑞代	(小林市立永久津中学校 教諭)			